

第5章 資料報告

第1節 6・7世紀の手工業生産と地域の編成

—地域開発と豪族の交通—

菱田 哲郎

はじめに

みなさん、おはようございます。今、過分なご紹介をいただきましたが、関西よりまいりました、菱田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

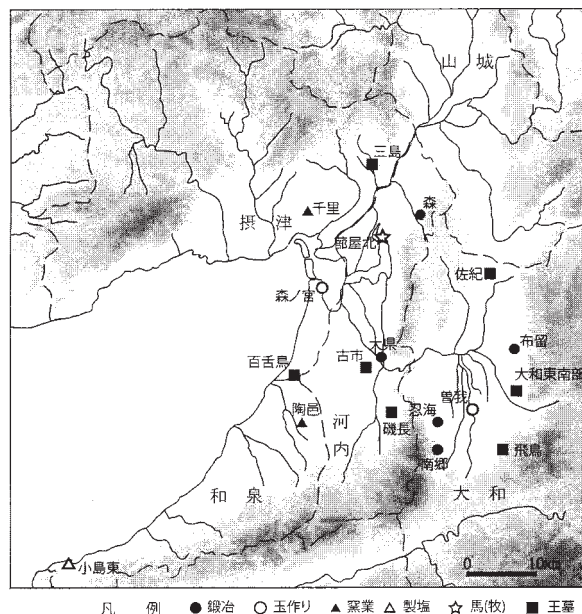
実は静岡県は、古墳研究の盛んなメッカの一つであると言っていいと思います。

私どもも、よく学生のゼミとかしておりますと、静岡県での様々な古墳の研究が、そういう学生の参考文献としてあがっているということが、頻繁にあるのですけれども、今日はそういう、こちらでの古墳研究をリードされている皆さんとご一緒に、こういう機会に話をさせていただけることになりましたこと、大変感謝しております。また素材になりました中原4号墳ですが、勉強させていただくと、こんなに面白い古墳があったのか、と目から鱗でして、この地域、駿河国富士郡というのがこんなに面白い場所だったのか、ということを痛感いたしました。その、どう面白いか、ということをお話をしていくことになるわけですが、このあとのお話の中でおそらく当時の王権、大和にだいたい宮がありますが、そういう王権との関係というようなことが、この後たびたび出てこようかと思います。

そのためにもまず、そういう王権の周辺でどういう事が起こってきているのか、それがまた全国にどういうふうに影響をおよぼし、あるいは繋がっていったのか、こういうことにつきまして、少し詳しくご説明をさせていただいて、ある意味で午後のご発表に対する一つの地ならしのような形をとらせていただければありがたい、というように思っております。

1 5世紀以降の手工業生産の展開

日本の国づくりがどのように進んだかというのは、実はいろいろ議論が分かれておりまして、論者によっては早い時代、もう3世紀の時期、卑弥呼の時代にはもう国家だ、という方もいらっしゃいますし、もっと遅くて、律令国家ができる飛鳥の時代になって初めて国づくりが整うんだ、という方もいらっしゃって、百家争鳴の感がございます。しかし私自身は、今日この後主題になります、様々な物の生産、手工業生産もそうですし、農業生産もそうですが、そういう生産であったり開発であったり、そういうところに着目をする、と、だいたい5世紀、古墳時代でいうと中期と呼んでいる時代が、国づくりにとっては決定的に大きな革新の時期であったのではないかと考えております。その評価がいいかどうかは別にしましても、その5世紀を起点にするものが、その後のずっと長い歴史の中で基盤になっていったということは実は動かない事実でありますの



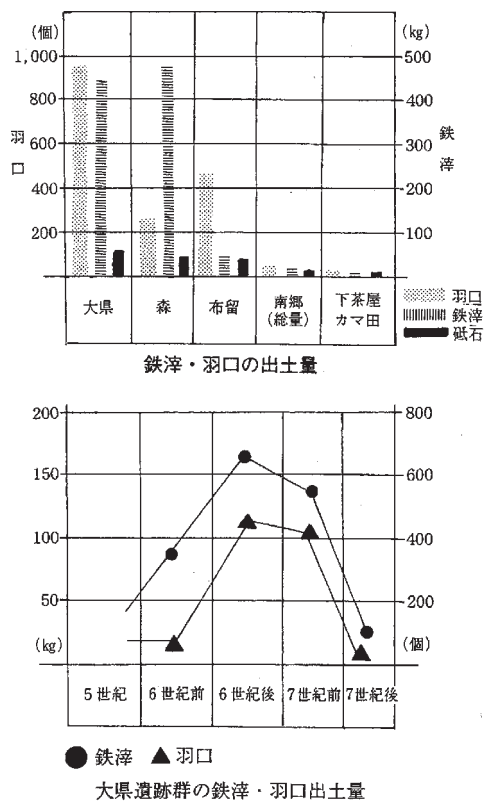
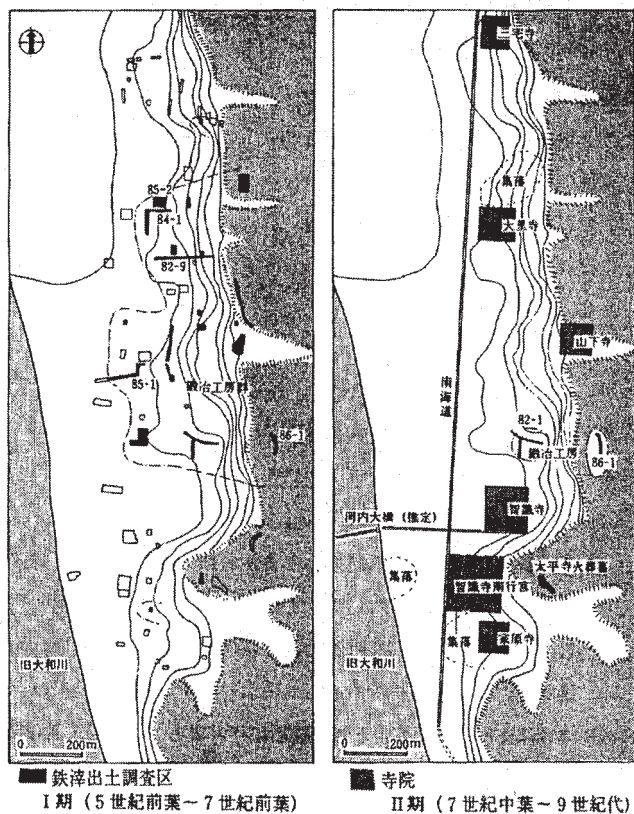
第150図 5・6世紀の手工業拠点と王墓

で、今日はまずその5世紀に始まる様々な物作りというものを見ていただければ、と思っております。

第150図は、今の大阪府を真ん中において、右側に奈良県、右上が京都府に大体あたる関西の主要部分の地図にあたりますが、その中にこの5世紀の段階に成立してきました主要な生産拠点を地図上におとしたものです。さきほど、中原4号墳の説明の中で、鍛冶具に注目してください、というお話がありました。これは何故かという、やはり鉄の道具というものは、「鉄は国家なり」という有名な言葉があるように国づくりにとっても重要で、武器として先ず何より軍事力の最先端の技術でもありますし、また物の生産、物作りにとっても鉄の刃物の類というものは不可欠な重要なものになってまいります。ですからその鉄の道具を作る鍛冶工房というものは非常に重要な役割を果たしております。この近畿地方の事例でいいますと、大阪の柏原市というところに大泉（オオガタ）遺跡、交野市というところに森遺跡、それから奈良県天理市というところに布留遺跡、そして葛城市忍海と御所市の南郷など、いくつかの拠点的な鍛冶工房が成立してくることがわかつ

ております。

第151図がその内の大泉遺跡の事例になります。それから第153図に、その当時新しく伝わってきた鍛冶具、五条猫塚古墳で出土しておりますが、こういう物を示しました。先ほどのお話をよく聞いていらっしゃる方は、あつ、これは鉄鉗だな、ということがすぐお分かりになるかと思いますが、実はこういう物が定着するのも、この5世紀の初め頃に朝鮮半島から伝わってきた渡来人による新たな技術なのですけれども、右側に復元図（第154図）を出しております。こういった轡をつかって高温で熱した鉄を打って刃物などにしていくための道具類が、実際に遺跡で出ているということになります。こういう技術の革新を伴って、そして大規模な生産が行われるようになりました。これが5世紀から6世紀の鍛冶工房の様子でして、その生産量の多さってどうやって測るのかって言いますと、この工房などでは沢山のスラグという廃棄物や、この轡の先端部分で使われる羽口ですね、この土管の先みたいなものですが、こういうものが遺跡で大量に出土してまいります。その出土する量を推移でとると第152図の



ようになるのですが、5世紀から6世紀にかけて大量の生産を行っており、そういう主要な拠点の工房が成立しているってことがわかってきます。5世紀に先に近畿地方、畿内で先行しますが、瞬く内に6世紀にはこういう鍛冶具の広がり、鍛冶工房の広がりということで、全国に広がっていくということになっていくわけです。

それから、先ほども中原4号墳の出土遺物の紹介で須恵器がとり上げられていましたが、須恵器の生産が始まるのも4世紀の終わり頃で、ちょうどこの革新の時期に当たっています。舞台は陶邑という大阪府南部と千里と呼んでいる大阪の北の2箇所、この時期、西日本を中心に須恵器の生産地が確立しますが、重要なのは、この後継続的な展開を遂げていく大規模生産地が成立するということが大きな特色になっています。たとえば先ほどの陶邑の窯というのは、初期の窯だけでも三つの丘陵に跨って存在していて、丘陵全体を、この地区全体を焼き物の窯場としていこうという計画が最初からあったということが伺えます（第155図）。実際に調査されている窯の中でもっとも古いTG232号窯ですが、14メー

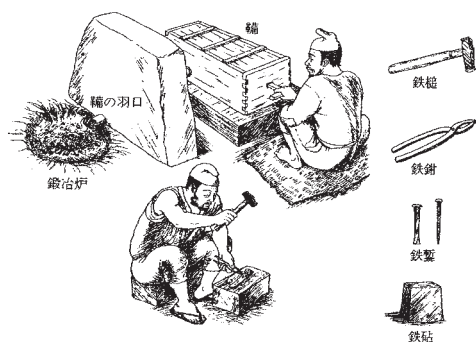
トルほどの範囲に捨てられた失敗品と灰などがおびただしい量が出ていて、当初からかなり大規模な生産を行っているらしいということが判っております。その初期の須恵器は、朝鮮半島の同時期のものに酷似する形態をしております。渡来人の参画を得て新しい技術が定着したということになります。

そもそも窯と言うのは、今だとあたりまえなのですが、たいへん優れた装置でして、斜面にトンネルを掘ることによって、トンネル効果で勝手に空気が吸い込まれますから、この中は常に高温を作りだすことができます。また、一方から一方へ空気が抜けていくので、その焚口の部分をコントロールすることによって、中の空気を酸化の状態にしたり、還元の状態にしたりというふうにできます。床面や壁が青く見えているのは還元の状態を長く維持したことを示しておりまして、須恵器で見るような青く緻密な器というものを、簡単にという語弊がありますが、こういうものを焼き上げることができる装置として成立をしてきたということになるわけです。西日本にかなり広がっていますが、拠点的な窯として陶邑の窯が成立してくることが重要ということになります。

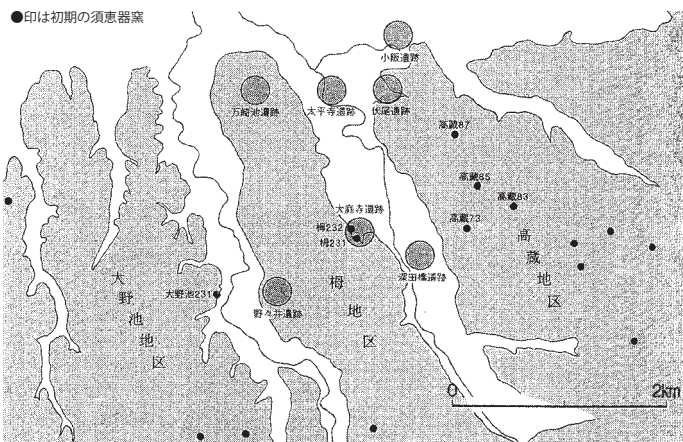
面白いのは、そこから5世紀の終わりから6世紀にかけての動きなのですが、これが全国各地に広がっていくという状況が確認されています。玉突き的な状況もあると思うのですが、高坏の脚の絵をずっと並べてみますと（第156図）、もともとの陶邑の形態によく似せて作っているということが解ります。静岡県内でも湖西、浜松、磐田、袋井あたり



第153図 五条猫塚古墳出土鍛冶具



第154図 轆の復元図

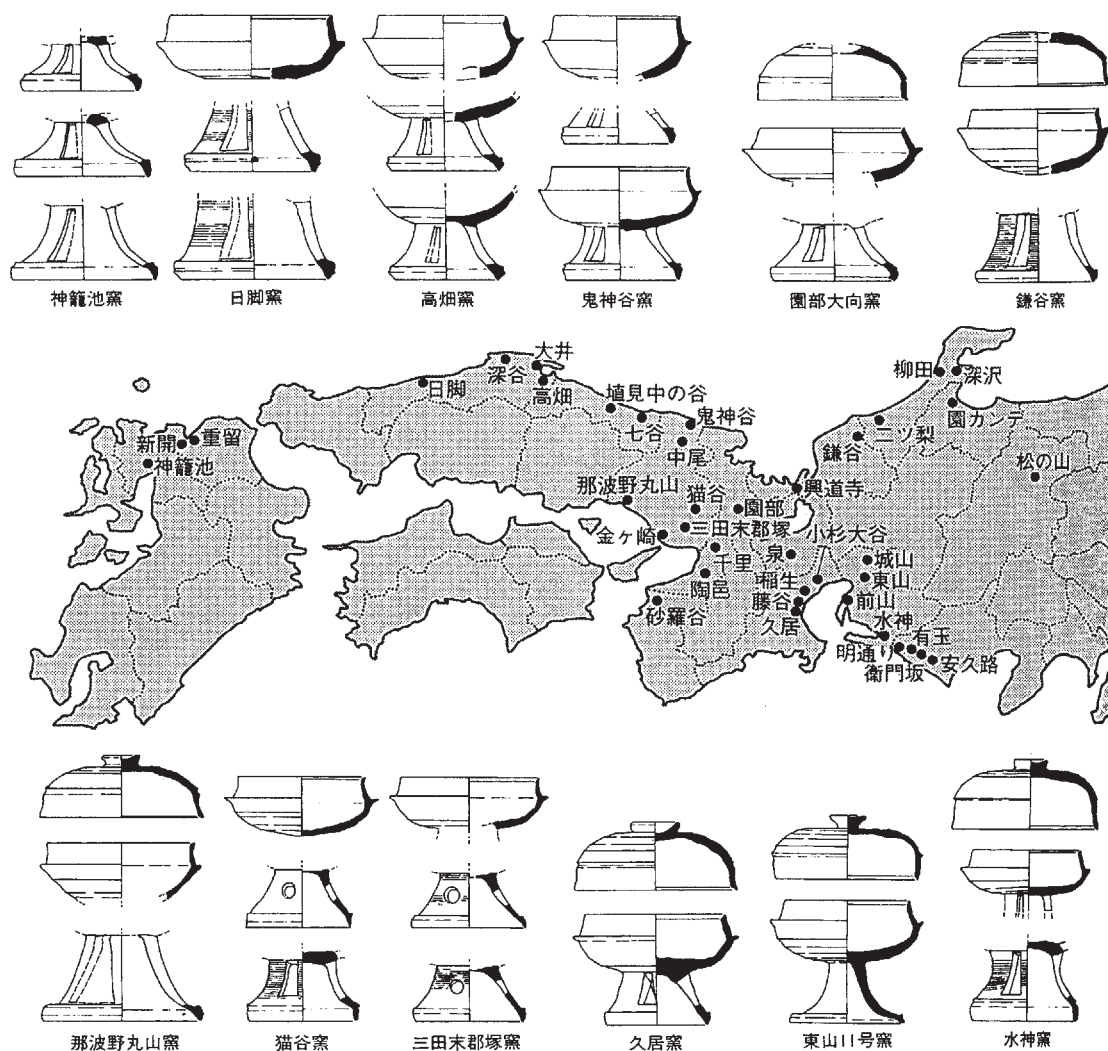


第155図 陶邑窯跡群の成立

に、それぞれ見つかっているように、かなり点々と各地であります。もちろん窯跡っていうのは、まだ見つかっていないものもたくさんありますから、私自身この5世紀の後葉から6世紀の初めにかけての窯場と言うのは、もっとたくさん全国にあっているかなと思っております。ですから静岡県東側にも及んでいるのではないかなという風に想像しておりますけれども、こういう生産技術が5世紀の早い段階に、王権の膝元と言っている近畿地方、畿内で確立した後に、5世紀から6世紀にかけて全国的に広がっていくという現象、これは須恵器という焼き物、残りやすい焼き物ですので、ここからその伝わり方がよく分かるという状況になっております。

この時期にはいろんな現象が起こるのですが、玉作りもその一つです。玉作りもいくつか拠点的な生産地ができるようなんですが、中でも大和盆地の飛

鳥に近い橿原市の曾我というところで、巨大な玉作り工房があるということがずいぶん前の調査ですが解ってまいりました。そこでは様々な地域で産出する素材は、近畿地方では滑石が多いんですが、遠方で産出する琥珀であったり、メノウであったり、あるいはヒスイ、水晶であったり、こういう日本各地で出てくる素材を一箇所で集めて、玉作りをするということになります（第157図）。これも5世紀になって成立をしてきて、古墳時代の間、6世紀中位までは続いているようですが、言ってみればまさしく王権の膝元、王宮の近くだろうと思いますが、そういう場所で、大規模な玉作り生産をまかなっていると考えられます。その後、6世紀になると今度は逆に、また出雲の玉作りとかが非常に盛んになっていて、また適材適所、産地に近いところでの玉作りに戻ったりもするのでありますけれども、その5世紀の段



第156図 5世紀後半から6世紀前半の須恵器地方窯

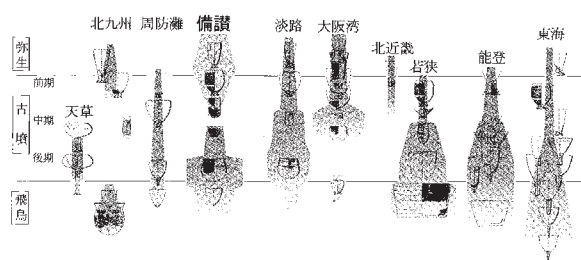
階に一つの大きな動きがあります。

それとよく似た動きが塩作りにあります。これも（第158図）でご確認いただければと思うのですが、もともとの塩作り、塩は濃縮した海水を熱してひたすら水分をとばして塩を作るというやり方、これ、土器で作るので「土器製塩」という言い方をしますが、このやり方は、鉄釜が出来るまでの基本的なやり方ですけど、その一つの中心的な産地が備讃瀬戸です。吉備と讃岐ですから岡山県と香川県の間に挟まる場所で、お年を召した方ならば昭和40年頃まではその辺りたくさん塩田があって、近代でも塩作りの中心地であったということをご存知だと思いますが、そういう瀬戸内海で塩作りが弥生から古墳にかけて盛んだったのですが、その遺跡の消長といますか、盛衰を調べた、香川県の大久保さんの研究成果なのですが、ちょうど5世紀の段階で、衰退するということが分かっています。ちょうど同じ時期に活発になるのが大阪湾、淡路などですね。やはり王権に近い近畿地方での生産が活発になってきます。言うならば塩作りも王権の足元での集中的な生産に、一時期、なってるらしいということがわかります。この段階には、小さな小型のカップ型の製塩土器、大阪湾型といったりしますが、登場しております。これは、後で述べますが、馬を飼うための牧場にこういう物が運ばれたりしてますので、そういう持ち運びも含めて塩の生産とそれから運搬というものを考えた小型の容器が登場するという特色があります。岡山の方もこの後また製塩が復活するのですが、こういう新たにでき上がった小型丸底の製塩土器をここで受け入れるという形で、また再開することが分かっています。この備讃瀬戸は、むしろ6世紀になりますとさらに大規模な生産になってきます。同じ時期、若狭も大規模な生産になってきます。これらの生産地は、飛鳥、奈良時代の塩のシェアをかなり大きく占めていくということになっていきます。そういう意味で、一旦5世紀の段階で、王権の足元に塩作りをまとめた後に、6世紀からまた各地での生産が復活するというか、また適材適所で始まる、こういう現象が塩作りで見られます。

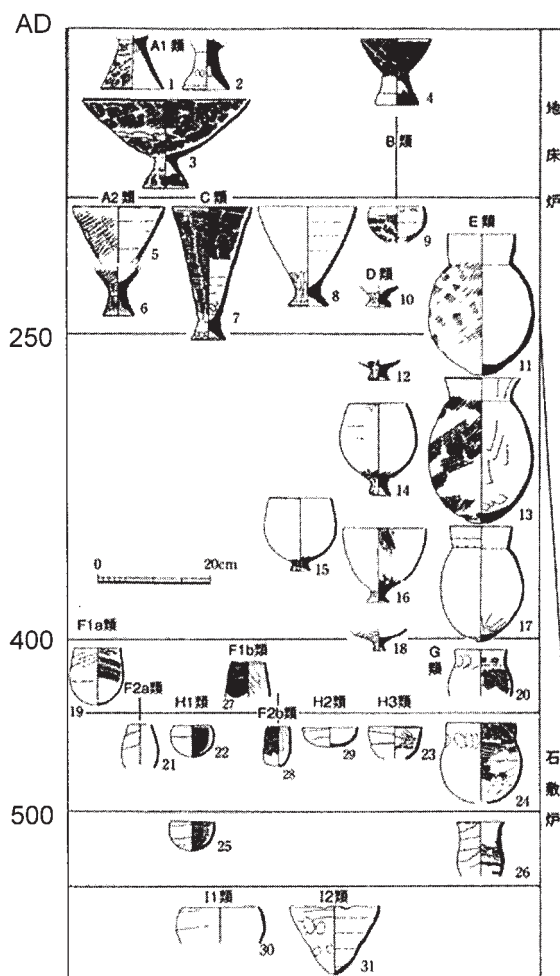
それから、馬の飼育が始まるのも5世紀でして、一番明瞭な例は、大阪平野の東の方になります。大



第157図 曾我遺跡の玉材料の原産地



第158図 製塩遺跡の消長



第159図 製塩炉の変化

阪平野の真ん中辺、河内のあたりは、もともと湖でして、その湖にいくつもの川が流れ込む、こういう低湿地のところに「牧」ができていたようです。

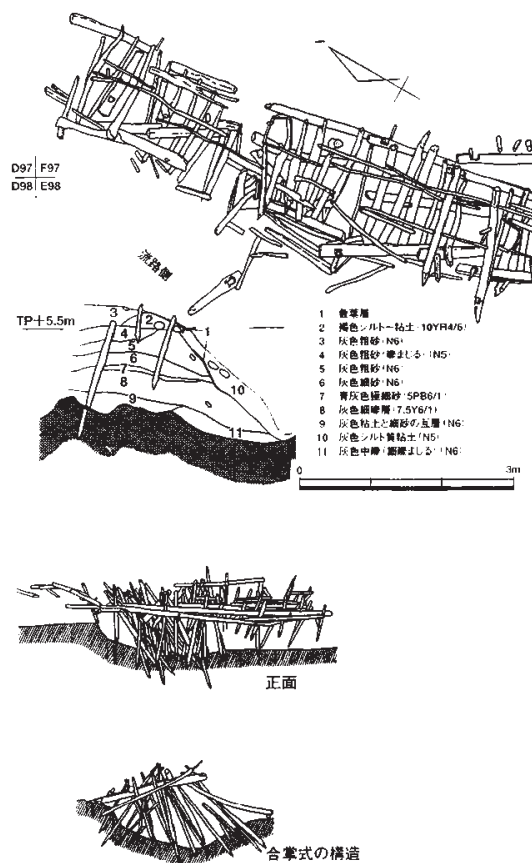
そういうところにある、大阪の四条畷市部屋北遺跡で大規模な調査が行われた結果、馬を埋葬した土坑、従来から「おむすび型の土坑」と呼んでいたのですが、これ、馬の埋葬だったんだということがわかりました（第160図）。近くの遺跡では、馬に乗るための鞍が出てますし、朝鮮半島からの渡来人を示すものも出土しています。同じ遺跡で先ほどの製塩土器が大量に埋められたという状況も見つかって、馬を飼うためにはミネラルとして塩が必要だという知識も含めて馬を飼い増やすという技術が伝わり、これが起点になっているということがわかります。馬の生産も瞬く内に長野県の伊那谷だったり、さらに東であったりというように各地に広がっていった、馬を放牧するのに適した土地のあるところへ、その後5・6世紀を通して、瞬くうちに広がっていくということになります。

他にもですね、近畿地方ではこういう土木技術がかなり革新されたようでして、堤を築く技術などが整えられていったということが遺跡の調査から明らかになっています（第161図）。



第160図 部屋北遺跡の馬埋葬

こういう様々な手工業生産の展開にあわせる様に、そういった地域の中に伝承上の王宮の所在地を重ねてみると（第162図）、ほぼほぼこの近畿地方、畿内のエリアの中で様々な王宮が造られていったということがわかっておりまして、まさに5世紀の段階にこの王権の膝元、後に畿内と呼んでいるエリアが形成されて、そこでは様々な生産も行われ、そして王宮も築かれ、そして王墓、有名な百舌鳥古墳群や古市古墳群というものがその中におかれますが、こういう王権の基盤というものが5世紀の段階に整えられていったと言えます。それから、もう一つ先程来お話してきましたように、その5世紀に築きあげられた基盤がもとになって、それが各地に伝わっていくという現象が早いところで5世紀後半から起こり、5世紀から6世紀にかけての一つの基調をなす動きになっていきます。そういう意味で5世紀の段階の、この倭国の中心部分の形成というものは、その後の日本の列島全体の国づくりにとって非常に大きなターニングポイントになったんだというように考えております。



第161図 久宝寺遺跡の護岸施設および「シガラミ」

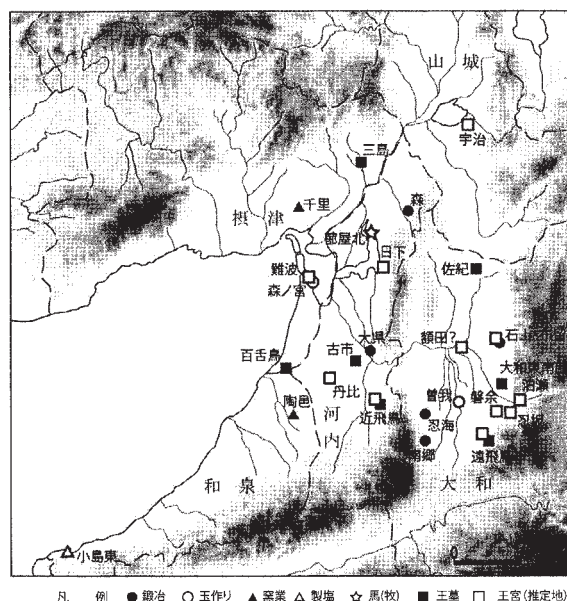
2 ミヤケの設置と地域社会の形成

次にその6世紀の段階にどのようにモノが伝わり、そして把握されていったのかということについて、少し文献の研究なども参照しながら、お話しをしてまいりたいというように思います。

これも扱いにくい言葉なんですけど、6世紀代に各地の拠点におかれた施設として「ミヤケ」というものがあったということが知られています。ミヤケというのは「屯倉」と書きますけれど、本来の意味は「ミ」という尊称に「ヤケ」という建物をあらわす言葉がついて、「尊称+建物」なので、せいぜい「立派な建物」というぐらいの意味しかありません。文献の中でいくつも、屯倉を置いた、というような記事が出てきますけれども、そういうものの実態がどういうものであるか、考古学的にはどういうものが当たるのかってことは、随分これまでも研究はあるのですが、これも意見がわかれているということになります。ただ、文献に出てくる例でいうと、先ほど出てきた郡の役所、富士郡の役所が東平遺跡だと言うお話がありましたが、郡の役所のことを郡（こおり）の屯倉と呼んでいる例もありますので、お役所的な物を屯倉と呼んでいるらしい、ということを考えてよいかなと思います。だから、屯倉という言葉は今風に考えれば「お役所」といってぐらいの意味なのかなと、とっておけばいいと思っております。

その屯倉が、実は日本の古代においては、ちゃんとした郡の役所ができるまで、相当数各地にあったらしいという事がうかがえる資料、証拠になる史料がございます（史料1）。これを説明を簡単にいたしますと、大化2年、いわゆる乙巳の変のクーデターが起こった翌年に、様々な新政策が発表されることになってますが、ここも大化改新があったか無かったか議論が随分わかれているところですけども、記録の中でどんなことが出てくるかという中に、ちょっと面白い屯倉を巡る議論があります。これはどういう内容かというと、皇太子というのが中大兄皇子、後の天智天皇、その時の天皇は孝徳天皇で、その二人の間でのやり取りです。要は天皇が、あんたが持つてる屯倉、あるいは部民ですね、名代、子代という部民のことなのですが、そういうものをいったいどうしようかという相談をしているわけです。

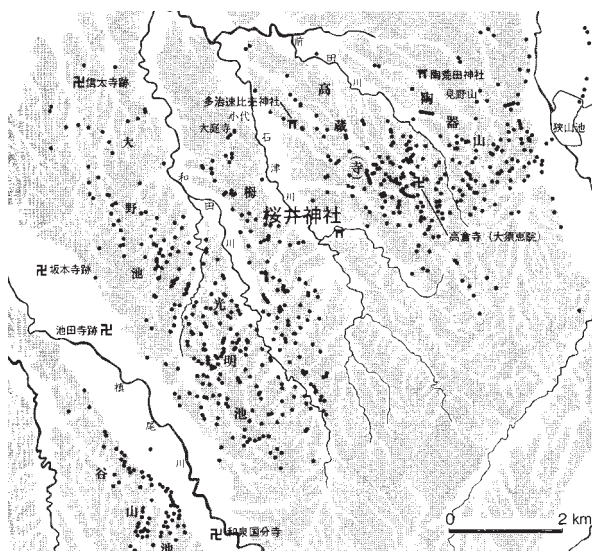
「其れ群（むれむれ）の臣（おみ）連（むらじ）、及び伴造（とものみやつこ）、国造（くにのみやつこ）」、これも実は地方豪族ですね、地方豪族たちの持つて「昔在（むかし）の天皇の日に置ける子代入部（こしろいりべ）」っていうのが子代のこと、それから「皇子等（みこと）の私に有てる御名入部」、これが名代のことですが、そういう子代や名代、それから「皇祖大兄」は彦人大兄皇子という中大兄からみるとおじいさんにあたりますが、その名代です



第162図 手工業生産地と王宮推定地

史料1 『日本書紀』大化二年三月壬午条
皇太子、使を使して奏請して曰く、昔在の天皇等の世、天下を混齊して治めたまいき。今に及速びて、分れ離れて業を失う。天皇、我が皇、万民を牧うべき運に属りて、天人、合応えて、厥の政、惟れ新なり。是の故に、慶び尊びて、頂戴して伏奏す。現為明神御八島国天皇、臣に問いて曰く、其れ群の臣連、及び伴造、国造の所有る、昔在の天皇の日に置ける子代入部、皇子等の私に有てる御名入部、皇祖大兄の御名の入部彦人大兄を謂う也。及び其屯倉、猶古代の如くにして置かんや不や。臣、即ち恭いて詔する所を承りて、奉答て曰さく。天に双日無し、国に二王無し。是の故に、天下を兼并して、万民を使いたまうべきところは、唯だ天皇のみ。別に、入部及び封ぜる所の民を以て、仕丁に簡充せんこと、前の処分に從わん。自余以外は、私に駆役せんことを恐る。故、入部五百廿四口、屯倉一百八十一所を献る。

ね、そして、その屯倉をどうしましょうか、昔のように置くのか置かないのかっていう事を尋ねた時に、いやいや今や全ての土地や民は天皇のものですからそういう物は返上しましょう、ということになって、最終的に中大兄が持っている部民 524 戸、それから屯倉 181 所を奉るというように、中大兄がおそらくおじいさんの代、彦人大兄などから、父親が舒明天皇ですが、そこを経て継承してきた先祖代々の部民や、この屯倉という物を献上するという内容で、事実としていいのかなと思いますが、その数がなんと、その一人の皇子が持っている屯倉の数だけで 181 もあると出てきます。これは文献記録で知られている屯倉の数とほぼほぼ同じくらいで、要は文献に知られていない屯倉が無数にあったと考えてよいだろうということをほのめかす数字だと言えます。文献の中には 6 世紀には、どこそこに屯倉を置く、駿河でも唯一、稚贄屯倉（ワカニエノミヤケ）を置くという記事がありますが、そういう事実は実は氷山の一角であって、それ以外にたくさんの屯倉が存在したと考えられます。現に地名を見ても、そういう文献に出てこないけれど、ミヤケという地名があるよ、というような場所が各地に



第 163 図 陶邑窯跡群の分布と社寺

第 15 表 陶邑窯跡群の地区別基数

	5 世紀	6 世紀	7 世紀	8 世紀	9 世紀
大野池	31	2	2	2	0
光明池	14	21	23	41	1
梅	22	38	36	22	0
高蔵	55	38	17	39	3
陶器山	11	38	12	15	11

ありまして、そういう隠れた無数の屯倉があるということになります。ちょっと注意しておきたいのは、「伴造、国造の所有する」ということですから、屯倉は本来お役所のような、そこを中心に王権に奉仕するための拠点なんですけども、そういう物を豪族たちが持っている、豪族たちが管理をしている、という事がこの記事からもうかがえます。ですから、屯倉は、辞書的な紹介の中では天皇の直轄地とかいうように出ることがあるのですが、実際にはそうではなくて、もちろん王権に奉仕する拠点ではあるのですが、実態は、その豪族たちがそこを管理しているということはこの記録からも十分に読み取れます。そういう理解でいくと、6 世紀代、いろんなところにたくさんの屯倉があって、それぞれの地域の豪族達は、その管理を通して、王権に奉仕をするというようなことを想像させる記録になります。

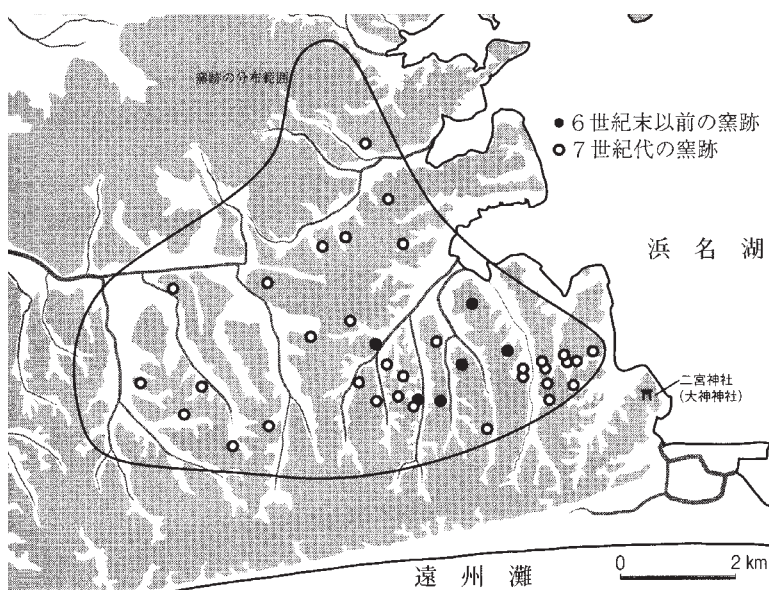
実際にその屯倉という物が、6 世紀代どのように機能しているのか、それがわかる事例についてお話をしていきたいと思います。先ほど見た巨大な生産地では、その生産者達は、部民として把握されている人たちであったのではないかと、ということが一応想像されます。第 163 図は、大阪の陶邑の窯をドットしているのですが、梅地区という地区が 6 世紀から 7 世紀の中心地なのですけれども（第 15 表）、この梅という字のすぐ右下くらいに「上神谷」と書いた地名があります。これ「かずわだに」と読んでいて、かつては「にわだに」と読んでいました。「にわだに」の前はおそらく「みわだに」と呼んでいたという地域になります。ですから、この梅地区、6・7 世紀の中心地の一つですが、ここは「みわだに」という地名で、しかもこの地域の有力豪族に神直（ミワノアタイ）、ミワというのは上神谷の神と言う字で、その神直がこのあたりにいたらしい。そういう須恵器の生産を神直、そしてその配下である神部（みわべ）と言う人たちが、陶邑全体ではありませんが、しかし陶邑の重要な部分を担っていたということがわかっております。また、桜井神社、これ桜井の屯倉というのがこの辺にあったということがわかっているのですが、おそらくそういう生産も屯倉が管理していたのではないかと推測させる事例になっています。ちなみにこの陶邑で、7 世

紀代、硯のような最先端の焼き物を盛んに焼いていたのは、この辺りです。

同じように神（ミワ）の人たちが焼き物をやっていたということがよくわかる例が、静岡県湖西になります（第164図）。ここは湖西市の後藤建一さんが随分研究されていて、私もそれを引用しているにすぎませんが、稀有な資料が残ってしまって、天平12年の浜名郡輪租帳です（第16表）。奈良時代の半ばくらいに、ここから税金を納めたという記録が正倉院文書に残っております。どんな史料かといいますと、昔も台風の被害を受けて田んぼが流れてしまったとなると、税金を免除してもらえますので、その税を免除される人のリストにあたる史料です。誰その所は全損だからいらないよ、とか、あそこは半分、税金も半分だけ払ってくれ、みたいな、そういうリストがたまたま帳面で残っているわけです。ですから、それによって、この地域に住んでいた人はどんな名前の人たちか、ということを知ることができます。そういう非常に稀な資料ですが、残念ながら、この資料の中で欠けているのは、まったく被害にあわなかった人で、それはここに書き上げる必要がないので、そういう運のいい人の名前は出てこないことになります。これを見てましても、神直、これですね、神人、神人部、やはりこの神っていう字を「みわ」と読みますが、先ほど陶邑で見た人たちが結構たくさんいるらしいということがわか

ります。実は一番多いのがこの「敢石部」と書いて「あえのいそべ」と読むんですが、「いしべ」ではなくて「いそべ」で、ようするに海浜の魚とか貝とかを採る人たちを「いそべ」と言います。ですから、この一番多い人たちはまさしく浜名湖岸らしく、こういう海浜の生産に当たっている人たちだなということになります。そういう意味で、この須恵器の生産をおこなっているのはその次にどうも多い神（ミワ）の人たちじゃないか。そして彼らが祭る神社、二宮神社、大神神社ですが、ここがこの新居郷にも存在をしていますので、彼らがこの神社を祭り、また須恵器の生産にあたっていると考えてよいのかなと思います。

このように6世紀代には各地に生産地が出来ますが、たとえば今見た大規模生産地である湖西の窯について見ると、神部という人たちが中心になっていて、そういう部がついている部民、部の民ですね、生産を行っている。そういう王権とのつながりというものが、こういうところからうかがえたりするわけです。他にもこの神部に限って言えば、牛頸であったり南加賀などで、神部の存在、美濃もそうですが、うかがえる例があり、実は須恵器生産には、神部だけでなくもっといろんな部民が関わっているんですけども、その中でも神部の関与というのはわりとメジャーな存在ではないかと思っています。ですから先程、須恵器の生産が各地に広



第164図 湖西窯跡群と大神神社

第16表 「天平十二年浜名郡輪租帳」

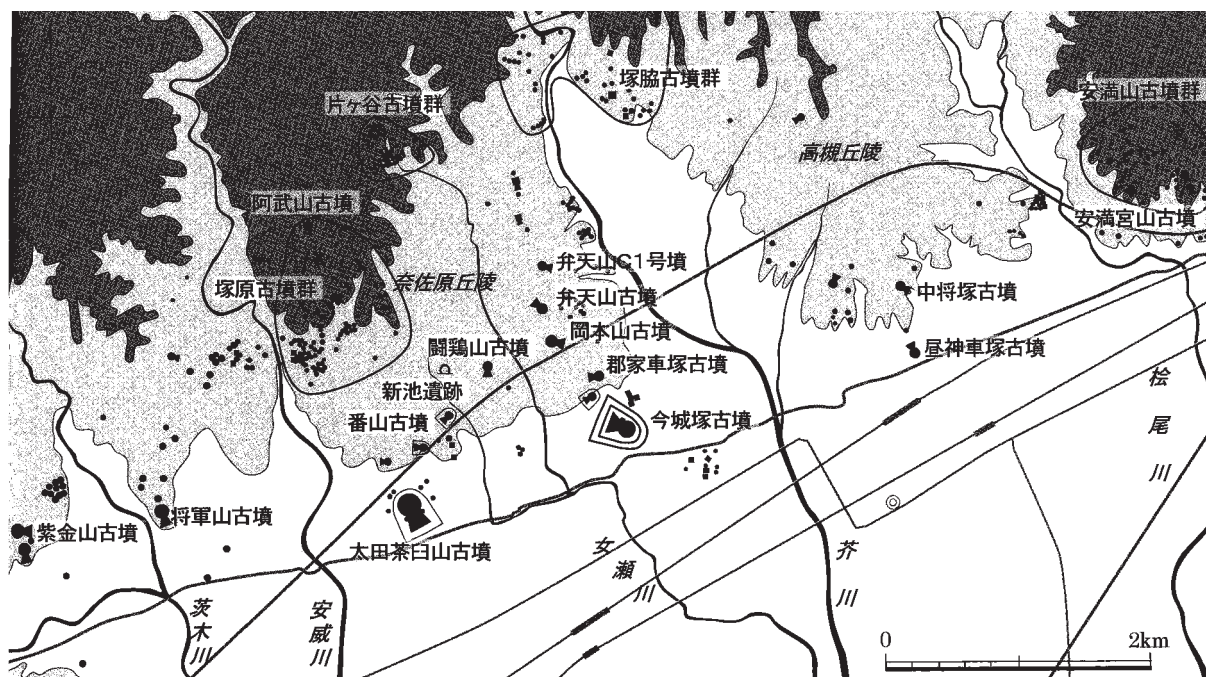
にみえる新居郷の住民

郷	戸	房	戸
神直	3	神直	1
神人	1	神人	1
神人部	3	神人部	2
和珥神人	2	和珥神人部	1
敢石部	18	敢石部	14
語部	5	語部	5
爪工部	2	爪工部	1
三使部	1	三使部	1
宗宜部	4	宗宜部	2
麻績部	3	麻績部	1
神麻績部	1	物部	1
伊福部	1	津守部	1
計	44	計	31

がるというお話しをしましたけれども、広がっていく過程で、その人たちは中央とのつながりを持った部民というような、一定の役割を持って広がっているんだというふうに考えてよいと思っております。こういう部のつく部民の人たちを統括する場所、管理する場所に屯倉というものが存在していたというのは先程の記録からうかがえますので、こういった生産の背景には、どこかにやはり屯倉というものがあると考えする必要があります。

今度はその屯倉の、実際に置かれた場所で、どのように地域の遺跡が変化しているのかということについて、また遠くの事例で申し訳ないのですが、大阪の北側の、高槻とか茨木と言っている京都・大阪間にあたるエリアですが、そこでのお話をしてみたいと思います（第165図）。ここに記録の中で、史料2に示しておりますが、534年に「竹村」と書いて「たかふ」と読んでいますが、竹村屯倉というものが置かれたという記録が出ています。ここは、そこに地名が出てくるので、御野原とか桑原とか、そういう地名のおかげで、これが大体どこにあるかというようなことがわかるエリアになっています。そこで、このエリアに6世紀代にこういう屯倉が置かれたということが地図上でわかるのですが、それが前代からとそれ以後でどう変化をもたらしている

のかということについて、見ておきたいと思います（第166図）。屯倉の置かれているエリアの中心を安威（アイ）川という一つの川が流れていまして、この川の流域が一つの大きなポイントになります。まず立地関係みておきますと、安威川の兩岸ですが、この辺りの灌漑水路というのは江戸の初めぐらいになって初めて記録に出てきますが、二本の大きな灌漑水路が両側にあるんですね。それがこの安威川に堰を作って、そこから水をひいて灌漑するというものです。これがいったいいつからあるのだろうかということがずっと悩んでいるところですが、この灌漑によって潤わされる集落、兩岸にあるのですが、それらがいずれも5世紀の前半に、朝鮮半島からの遺物などを伴って出てくるということがわかっています。ちょっと大胆な推測にはなるのですが、こういう灌漑がすすめられたのは、5世紀の初めごろで、技術を持った渡来人の集落が登場するんじゃないかと推測しております。屯倉になるのはそれから百数十年後のことですね。534年のことです。その時にどんな記録になっているかというと（史料2）、ここを屯倉にするにあたって二人の人物が出てきます。一人は三島県主飯粒（みしまあがたぬしいいぼ）という人で、この人はもともと三島県主というようにこの地域の土着の豪族ですが、喜んでその土地を



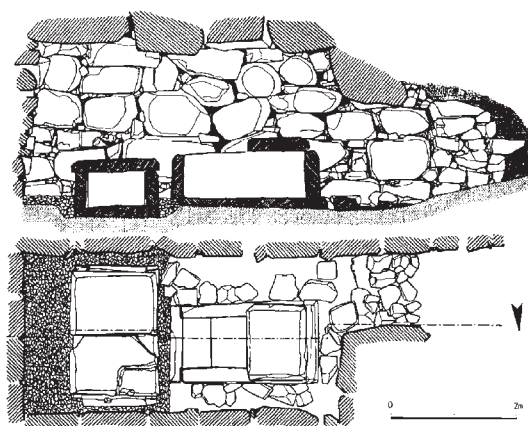
第165図 三島地域の古墳分布

提供した話になっています。もう一方ですね、凡河内直味張って言う人はちょっとケチっていい土地を隠して、それが露呈して大変叱責をうけて、後にこの屯倉の生産をおこなうにあたって、「丁（よぼろ）」すなわち、農夫を出しましょうと言って、何とか罪を償ったという記録が出てまいります。ですので、この地域のもともと土地開発にあたっていた三島県主、それから今度は凡河内氏という二つの豪族達が、一方は喜んで、一方は渋々、屯倉に土地を提供している、そういうことがわかります。

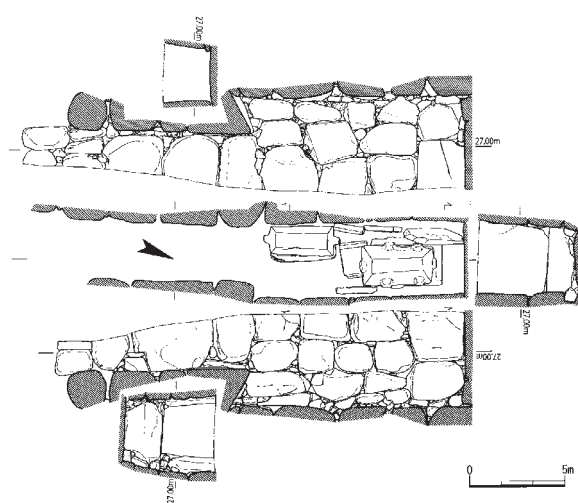
その後この地域はどんな風に変化していくのかというのを見てみますと、横穴式石室をもつ古墳が6世紀半ばぐらいに突如出てまいります。一つは南塚古墳（第167図）、一つは耳原古墳（第168図）ですが、そして同時に、この時期、7世紀8世紀におそらく住んでいた豪族たちと言うのは、地名を持つ

ていることとわかるのですが、中臣氏の一族がこの辺りにその後住んでいるということがわかります。

ですから屯倉の設置を契機として、この場合、ここを担う豪族の変化があり、そして古墳では横穴式石室が現れて、いままで古墳の空白であったところに、耳原古墳であったり南塚古墳が登場してくることになります。このように、どうも古墳の動きとい



第167図 南塚古墳石室実測図（1:120）



第168図 耳塚古墳石室実測図（1:400）

史料2 竹村屯倉に関する文献史料
『日本書紀』安閑天皇元年（五三四）
閏十二月壬午（四日）
三島に行幸す。大伴大連金村、従う。天皇大伴大連をして良田を県主飯粒に問わしむ。県主飯粒、慶悦すること限り無し。謹んで敬い誠を尽くす。仍ち上御野、下御野、上桑原、下桑原、并に竹村之地を奉献す。凡そ合せて肆拾町。（以下略）



第166図 安威川と用水路

(西暦)	(島下)	(島上)	安満宮山
300	紫金山 將軍山	岡本山 弁天山 弁天山C 1 郡家車塚	
400		太田茶臼山 番山	
500	南塚 青松塚 耳原 海北塚 將軍塚 (塚原古墳群)	今城塚 中將塚 昼神車塚	
600	初田1・2 阿武山		

第169図 三島地域の古墳編年

うものが地域の編成のされ方とリンクしています。そして、この場合、屯倉を作るということが記録にあるので、その変化の背景が屯倉の設置であることがわかる、という事例になります。

同じようなことは吉備でも言えますが、ここは時間の関係で省略しますが、こうもり塚古墳という横穴式石室を持つ巨大な古墳が成立する背景に、白猪屯倉（シライノミヤケ）とか児島屯倉（コジマノミヤケ）があるだろうと常々推測されています。

次にもう一つ別のパターンをお話ししていきたいのですが、屯倉の設置を契機にして地域の開発が進む事例を見ておきたいと思います。第170図は兵庫県真ん中にあたりにある多可町と呼んでいるところですが、妙見山っていう美しい山の麓で300基くらいのたくさんの古墳が築かれました。首

長墳は南麓の東山古墳群です。ここに大型の横穴式石室が集中しております。

ここは風土記にも出てきまして、大海山という山がこの地域の中に出てきていて、これは明石の郡、播磨の沿岸部の大海の里の人がここへやってきてこの山の麓に住んだので、大海山（おおみやま）と言うということが記されます。大海山の比定地と、先程見ていただいた妙見山の裏にありますが、もともと妙見山が大海山でいいんじゃないかなと思っています。そういう移住の記録が先程の風土記の記事に残っているのではないかと考えております。

古墳では6世紀の終わりから7世紀にかけて、大型の横穴式石室が次々に作られております。

この地域、先程も中原古墳群やその前段階の古墳からですね、集落との関係が議論がありましたけれ



第170図 妙見山麓の古墳群と寺所墓跡

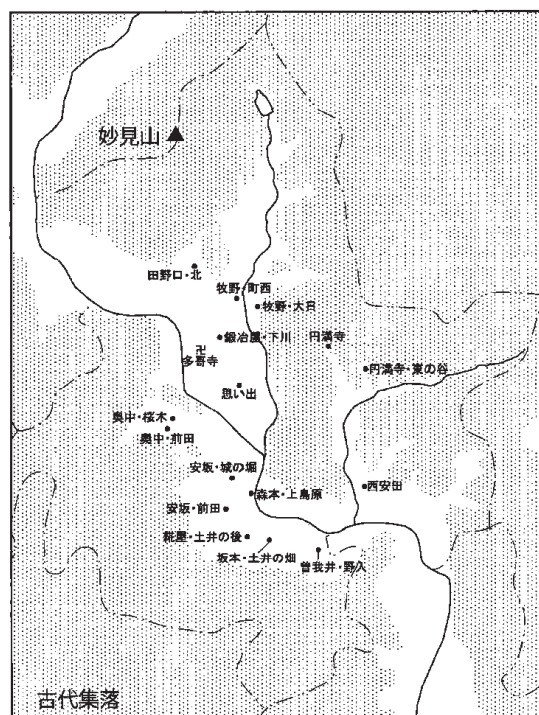
ども、ここも古墳と集落との関係をみていくと非常にうまく連動しておりまして、6世紀の終わり頃から集落もたくさんできて、すなわち、人がたくさん住み始めて地域の開発が進むことと、古墳が集中して築かれるということとが、どうも連動しているらしいということがわかります（第171図）。たくさん古墳が集中するのは妙見山の山裾になりますが、そこから見える範囲の中にどんなものがあるかと言いますと、先ずは古代のお寺跡、さっきも三日市廃寺の話がありましたが、ここは郡の名前をとった多哥寺。多可郡という郡の中心部になるのですが、いまもお寺さんがあって、もともと多哥寺だという

伝承を持っています。そして、そのすぐ隣に郡の役所跡、郡家（ぐうけ）といいます。こちらでは東平遺跡でしたが、それはやっぱり同じようにお寺のすぐ近くにあります。

多可郡の郡家では巨大な井戸も見つかっていて、井戸にはやはりシンボリックな意味があるのかなと思っています。そして、もうちょっと南の安坂・城の堀遺跡（あさか・じょうのほりいせき）というところでは、馬に引かせる犁（カラスキ）という農具があり、これは人が耕すのではなく牛あるいは馬によって耕すという当時の最先端の農具が導入されているわけです（第173図）。そういう地域の開

半野部	遺跡名	7世紀			8世紀		9世紀		10世紀
		前葉	中葉	後葉	前半	後半	前半	後半	前半
北	貝野前								
	田野口・北								
	牧野・町西								
	牧野・大日								
	鍛冶屋・下川								
	多哥寺								
	鍛冶屋								
	思い出								
安田	田満寺・東の谷								
	西安田								
	田満寺								
中	奥中・桜木								
	奥中・前田								
	安坂・北山田								
	安坂・城の堀								
	安坂・前田								
	森本・上島原								
	靴屋・土井の後								
	坂本・土井の畑								
部	坂本・丁田								
	曾我井・野入								

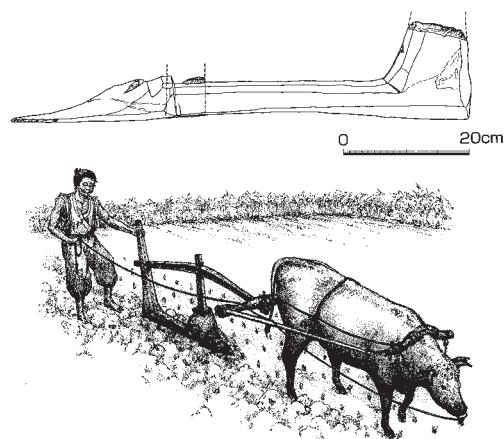
…遺構検出若しくは20点以上の土器出土
…20点未満の土器出土



第171図 妙見山麓の集落の消長



第172図 東山古墳群遠景



第173図 安坂・城の堀遺跡出土の犁と復原図

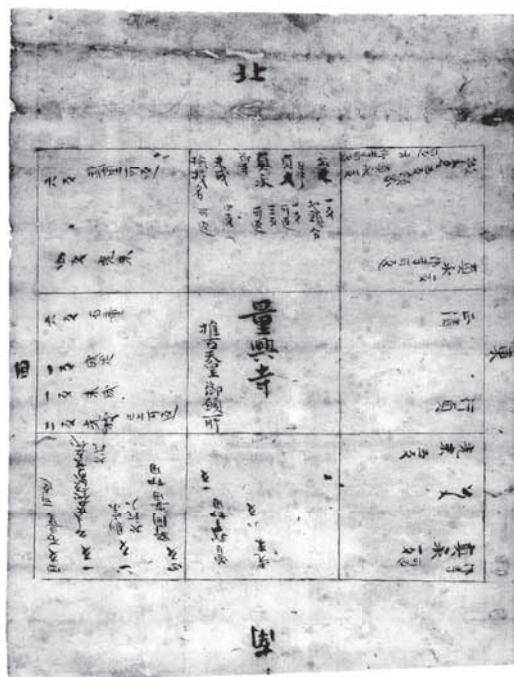
発が進み、古墳の主というものがそのまま後に郡の役所の長官、郡の大領といえますけども、そういう長官になったことを示す事例ということがわかります。

郡ができるのは、早くは大化の頃に「評」というのがあったっていうことになって、それが後の郡(コオリ)の原型だとされています。それ以前はどうだったのかということになりますが、ここもやはり先程見ましたように、6世紀の終わり位からは人が住み始めて、盛んにこういう開発をやっています。古墳もその時期の人たちのものがあります。おそらく、そういう人たちが拠点にしていたものが屯倉ではないかと言えそうです。

播磨国多可郡中郷三宅里
日下部漢目庸米六斗



第174図 平城京左京二条二坊五坪二条大路
濠状遺構(北)出土木簡



第175図 量興寺寺領図

というのは、第174図は平城京の左京二条大路の濠から出ている木簡なのですが、奈良時代の木簡の中に、播磨国多可郡中郷に三宅里というのがあるというのが出てまいります。ですので、地名でしかありませんけれども、この中郷というのがだいたい多可町の中村なのですが、その中に三宅里というのがあったということになり、どうももともと前代にあった屯倉が地名として残っていることを示す事例と考えてよいと思います。ですから、郡の役所が出来る前にそういう屯倉を拠点として開発をおこなっている、そういう姿がこの地域の成果から見えてまいりました。

ちなみに第175図は多可寺の後身で、現在も量興寺さんというお寺さんがあるのですが、そこが持っている中世の文書です。その中に中世初頭位に書かれた寺領図のようなものがあります。伝承としては推古天皇御願とあって、これは疑わしいということになりますが、しかし7世紀から存在していたお寺は瓦が出ていることは確かです。ここで面白いのは、



第176図 多可寺の位置

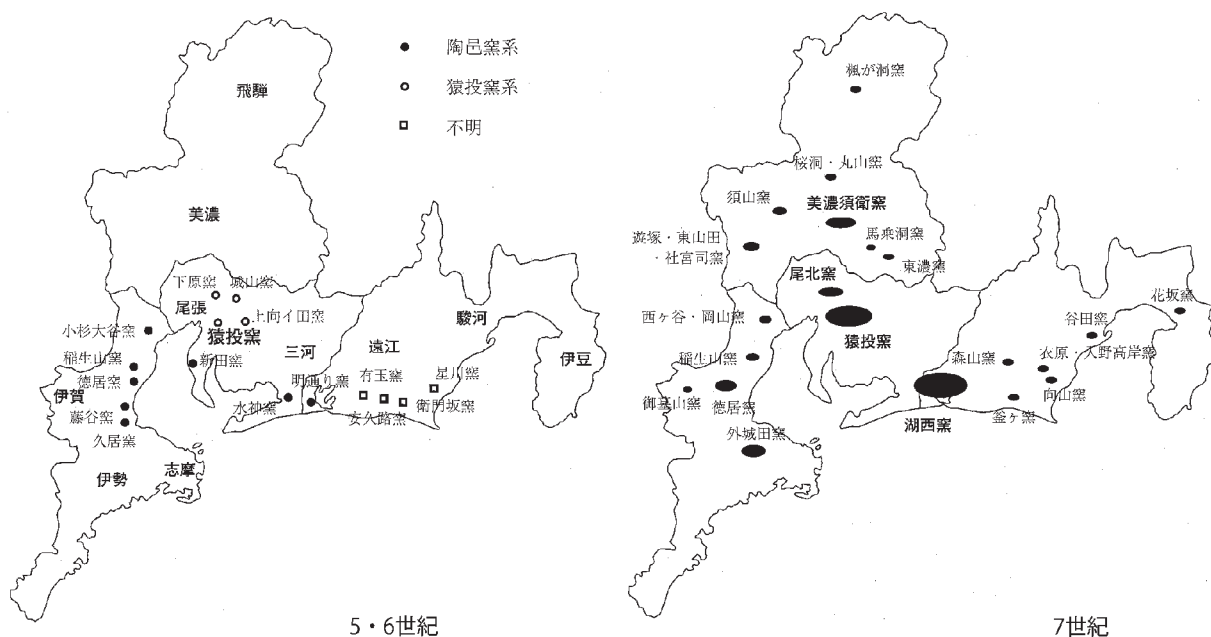
このお寺の周囲の地割に、誰がここを今耕しているかというようなことがずらっと書いてあるのです。ちょっと小さくて見えにくいのですが、いずれも返すべしって書いてあります。お寺が真ん中であって、周囲のこの八区画がお寺の寺領、寺の田んぼですね、寺田であったという事を示していて、おそらく誰かよその人がこう今持って耕していて、本来はうちの土地だから返すべしって言うようなことが書かれているのです。返すべし返すべしってうるさいくらいに書いてあります。こうやって、その1町の四方の中の何反が誰その分、何反は誰その分みたいに書いてあるのですが、ほぼほぼみんな周りには取られているなって感じがわかります。ただ、ここからわかることは何かと言うと、こうやって地域の真ん中にお寺を建てているのは誰かという、これはやはり豪族、大型横穴式石室の被葬者あるいはその子孫と考えていいと思うのですね。巨大な古墳を作った人たち、次の時代はお寺を造っていききました。何故作っていったかという、一つには、こういう形でもともと自分たちの持っていた土地を寺の田んぼという形にして残していくことがあげられます。それ以外にも、もちろん郡の役人になれば、職田って言って郡の役人の分の、これもかなりの面積なのですが、田んぼを持つことができます。ですから地方の豪族たちの保命策として、自分たちが開発

してきた土地というものを寺田にしたり、あるいは郡司の職田にして保っていく、そういうような狙いもお寺作りにはあったんだということを、これは示す事例になります。ちなみにこの多哥寺を現在の地割に置いてみても、ほぼほぼこの地図と同じような方眼、ここ八区画、お寺もあわせて九区画ですね、ここに復元することができまして（第176図）、こういう古代の姿が中世の文書に残り、現在の地割からも確認できるということになります。

私は、この地域の展開と、先程佐藤さんのほうでお話のあった富士郡の地域の展開は、かなり似ているという気がいたします。そういう地域の開発というものが進められる中で、どこかにおそらく屯倉のような施設があり、それを管理する人たち、それが次々にお墓を作っていった。そういうような現象が

第17表 駿豆の須恵器窯跡の消長

国	郡	5c	6c	7c	8c	9c	10c
駿河	志太		衣原			助宗	
	益有		入野高岸				
	安廬		天神山		谷田		
	富駿		秋葉山		東山田		
伊豆	田方				花坂		
	那賀茂						



第177図 東海地方の主要な須恵器生産地

ここ富士郡でもあっただろうと思います。このエリアの開発の結果、7世紀になって富士郡という形で領域が設定されていく中で、郡の役所、そしてお寺が造られ、また豪族たちはそこに関わっていくという歴史がみえてきそうです。日本古代の地方制度の面白い点は、そういう地方制度ができたときに新しく派遣されて誰かが来るのではなくて、もともとの地元の有力者が郡の役人になっていくというところが最大の特色です。ですから、それまでの地域の有力者が郡の役人になっていったと考えてよいわけですが、その前の段階にどんなことをしていたのかというと、今お話しして来ましたように、郡と同じような地域の核になる施設、屯倉のような施設を管理し、そういう屯倉の管理を通して、王権と繋がり、あるいは、そこと行き来するというようなことができていたのではないかと考えています。実は屯倉などを考えていく時に一つヒントになるのは、焼き物の窯だろうと考えております。先程、5世紀から6世紀に広がるって言いましたが、6世紀の間にも須恵器の窯は随分ありますが、わりと短命な窯が多いのです。屯倉の場合は、実はかなり手工業も関わっているということがわかっていまして、先程紹介した吉備も実は鍛冶生産とか須恵器生産が屯倉を核にして行われていたと推測されています。播磨の多可郡でも、須恵器の窯が同じ平地の北寄りにあり、地域の中で生産が完結するような様子というのがこの屯倉の時代に見られるわけです。

これを参照すると、実は静岡県というのは、この6世紀から7世紀前半ぐらいの、屯倉の時代と考えている時期に、小規模な窯があちこちあるんですね（第17表・第177図）。こういう場所はいずれも、その後の郡の役所なんかと関係してこないかなと、思っております。そして、結果としては、湖西の窯が、奈良時代には巨大になってきますのでどの窯もそれほど続かないんですね。7世紀の中でぼしゃってしまうのですが、しかし、あえて各地域地域に窯場を設ける理由というのが、そういう屯倉なら屯倉の完結した世界の中で手工業を一通り取り揃える。そういうような動きがあったと考えていいとこの分布から見ております。

3 地域開発と豪族の交通

最後に、屯倉の時代、つまり6世紀から7世紀前半にかけての時期というのは、各地の豪族達が頻繁に都と行き来をしているのではないかと考えます。当然、郡ができてからは、飛鳥時代、奈良時代にはたくさんの貢物、先程の布がまさしく税の一つですが、そういう税が都へ送られたり、あるいは都からの使節が頻繁にやってくるというのは、飛鳥、奈良時代の、古代の一般的な交通ですけれども、その原型のようなことはすでに6世紀には始まっています。もっと古い事例では、埼玉稲荷山の鉄剣銘（第178図）に出てくる「獲居臣（オウケノオミ）」という人が出てまいります。この人物が「杖刀人首（じょうとうじんのおびと）」、まあ武人でしょうか、こういう一つの役職としてずっと王権に仕えてきたということを言って、「獲加多支鹵（ワカタケル）」ですから雄略天皇の時に、天下を左治した、助けたというようなことまで言っておりますが、埼玉の、おそらく豪族の子供っていいですか、が若い頃こうやって王権の、王宮に出仕をして、そこで働いたというようなことの記念だというふうに、ここでは申し述べているわけです。後には、そういう制度は、舎人という制度として確立していくのですけれども、各地の豪族たちの子供たち、あるいは若い人たちが都へ出て働いたり、あるいは豪族そのものも都と行き来するというようなことが頻繁にあっただろうということが、こういう事例から推測できます。その結果と言ってもいいかもしれませんが、それぞれの豪族達が屯倉を管理するようになり、そこを通して王権に奉仕してまゐることになるのではないのでしょうか。「奉事根原」という言葉が鉄剣銘の最後の部分に出てまいります。そういう、王権に仕えるという意識の中で、各地の豪族たちの拠点形成や、王権との交通が進んだというふうに考えてよいと思っています。

その中で彼らは様々な物を入手します。中でも、刀・鎧・弓矢、こういう物は必須のアイテムであったということがわかります。第18表は、文献記録からおこしたもののなんですが、ずっと下って7世紀になると、豪族たちに対する武器武具を与えたリストです。一番上にあるのは、天智天皇三年に、大き

な氏の氏上に大刀、小さな氏は小刀、それ以外の、これ地方豪族たちですが、伴造等の氏上に盾と弓矢、みたいなものがでできますし、豪族たちが配備すべき武器などで必ず大刀とか鎧とか、そして弓矢がでできます。ですから、この王権に仕える、そういう人たちがそれを示すアイテムとしてたくさんの武器を持つ、そういうことは当然必要であったのではないかと考えています。

中原4号墳において、大刀がありますし、それからもう一つ、弓矢も矢の数がやはり非常に多い。これは大きな特色でして、矢筒に入った矢こそが矢一具とされるものであって、これは単に多いと言うだけでなく、おそらく溶けてしまった有機質の矢の矢筒があったんだろうと思うのですけども、そういうちゃんとした矢を持っています。そういうようなところからすると、やはり地域を代表する豪族であったんだということを示すアイテムではないかというように思っております。

その人物が何故、このやや小ぶりの石室に入っているのか。これは非常にアンバランスで、これだけの立派な副葬品が、何故このちょっと小規模な、見過ごしてしまいそうな石室の中に入っているのか、またみなさんのお話を聞きながら被葬者像を描くことができればいいな、というように思っております。

おわりに

なかなか地域に即した話ができなくて申し訳ないのですけれども、しかしここの古墳群で見えてることというのは、6世紀から7世紀の列島社会の動きを見ていく中で、かなり一つの典型になる、大きな足がかりになる事例ではないかと思いました。その背景には、この類稀なる資料ですね、これだけのものが荒されずに全部残されてくれていたことがあげられます。またこのロケーションですね。これまたいろいろ検討が進めばと思うのですけれども、先程お話にあった伝法沢川などとか、明治の地図をのせると、まさしくこのエリアから麓側がずーっと田んぼになっていて、古墳があるところから上側が台地になっています。そういう、ちょうど肥沃な台地の下の部分を灌漑していく開発っていうものが、おそらく、この5世紀から6世紀にかけておこなわれ

(表)
辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比垢其兒多加利足
尼其兒名弓已加利獲居其兒名多加坡次獲居其兒名多沙
鬼獲居其兒名半弓比
(裏)
其兒名加差坡余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来
至今獲加多支爾大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百
練利刀記吾奉事根原也



第178図 埼玉稲荷山古墳鉄剣

第18表 豪族の武具武器の装備

年	西暦	月日	対象	武具・武器
天智天皇三年	664	2月9日	大氏之氏上	大刀
			小氏之氏上	小刀
			伴造等之氏上	干楯弓矢
持統天皇七年	693	10月2日	浄冠～直冠	甲一領。大刀一口。弓一張。矢一具。鞍一枚。鞍馬。
			勤冠～進冠	大刀一口。弓一張。矢一具。鞍一枚。
文武天皇三年	699		正大式～無位	弓矢甲楯及兵馬。各有差。

て、そういうものを通して王権と繋がっていく地域の有力者像ってものをみることができるわけです。その姿と、そしてここはもう一つ大事なポイントとして、東海道を面する、つまりメインストリートにもあたる場所でもあります。そういう二つの要素というものが、この地域性を考えていく上で非常に大きなポイントになると思っております。そういう意味でもここの富士市の地域、旧富士郡でどんな地域編成がおこなわれてきたのかということを知ることができる格好の機会に、今日はなるのではないかと思います。これからの話に私もぜひとも参加させていただいて、豊かな地域史、そしてそれをまた列島の歴史の中にしっかりと位置づけていくということができればうれしい、と思っております。

つたない発表で申し訳ありませんでしたが、このエリアを理解するための背景になるような話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。



第 179 図 富士郡の古代地図

本論は、平成 30 年 1 月 21 日、富士市役所において開催された『平成 29 年度 中原第 4 号墳出土品 市指定文化財記念シンポジウム 中原第 4 号墳の被葬者に迫る』における講演内容を文字化し、当日配布資料やパワーポイント資料などを用い、再構成したものである。

なお、当日の資料集は富士市役所のホームページで公開されている。

参考文献

- 佐藤 祐樹 2016「伝法古墳群の展開と地域社会の成立」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
- 城ヶ谷 和広 2010「東海」窯跡研究会編『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』真陽社
- 鈴木 一有 2013「7 世紀における地域拠点の形成過程－東海地方を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』179 号 国立歴史民俗博物館
- 田中 史生 2002「渡来人と王権・地域」『日本の時代史』2 吉川弘文館
- 菱田 哲郎 2005「須恵器の生産者－五世紀から八世紀の社会と須恵器工人」『列島の古代史』4 岩波書店
- 菱田 哲郎 2007『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 菱田 哲郎ほか 2012『新修茨木市史』第 1 巻 通史編 1 茨木市
- 菱田 哲郎 2013「7 世紀における地域社会の変動－古墳研究と集落研究の接続をめざして－」『国立歴史民俗博物館研究報告』179 号 国立歴史民俗博物館